

Jun Abe: *A Movement Theory of Anaphora*

Boston/Berlin: De Gruyter Mouton, 2014. viii + 215pp.

杉浦克哉

1. はじめに

極小主義以前の生成文法では、解釈規則は移動規則から切り離されて考えられてきた。しかし、極小主義ではMoveをMergeの一部と仮定し、解釈規則をMoveから捉えようとしている。本書はこの方針に従い、照応関係を移動の観点から説明することを試みている。

本書の構成は以下のとおりである。1章は導入で、2章で照応形の移動理論が提案される。この枠組に基づき3章以降で日英語の統語と意味に関する様々な事実が説明される。3章では英語の強交差効果が、4章では英語の再構築効果が説明される。そして5章で日本語の照応的な空の代名詞、6章で日本語の総称的な空の代名詞、7章で英語の非義務的コントロールのPRO、8章で日本語の再帰代名詞「自分」が扱われる。9章は結論である。以下では2章で提案される照応形の移動理論の概略を述べた後、分析を評価しつつ問題点を指摘する。

2. 照応形の移動理論

本書は先行研究から3つの仮定を採用し、照応形の移動理論を構築する。1つ目は最終手段としての代名詞の挿入である。これは移動が局所性違反を引き起こす場合、連鎖の尾部に代名詞を挿入することで違反を修復する方法である。

2つ目は束縛条件C効果が、代名詞と照応関係にあるDPの下方移動を禁止することから導かれる点である。そして3つ目は連結理論である。

また、本書はChomsky (1982: 86) の考えを用い、格は持つが音形を持たない代名詞proを仮定し、proに音韻母体が挿入されることで顕在的代名詞であるhimやherが作られると仮定している。

これらの仮定に基づき照応形の移動理論が構築されるが、その主な特徴は次の2点に要約される。(i) 照応関係は音形を持たない代名詞proの移動により確立される。(ii) proの移動が局所性に違反するとき、移動によって作られた連鎖の尾部を発音することで連鎖は修復される。

照応形の移動理論による具体的な派生は(1)、(2)で示される。(1)はproの局所的移動の例、(2)はproの非局所的移動の例である。

- (1) a. ___ seems [pro to be honest]
 b. pro seems [pro to be honest]
 ↑
 c. John seems [pro to be honest] (Abe (2014: 8))
- (2) a. ___ thinks Mary likes pro
 b. pro thinks Mary likes pro
 ↑
 c. pro thinks Mary likes him
 d. John thinks Mary likes him (Abe (2014: 9-10))

(1a)でproは埋め込み節の主語位置に併合された後、(1b)が示すように元位置にコピーを残し、母型主語位置へA移動する。そして(1c)が示すようにA連鎖の頭部位置のproがJohnに置き換えられ、適格な文John seems to be honest.が作られる。本書ではJohn seems to be honest.のような主語のA移動を伴う文は、埋め込み節の主語位置に基底生成されたJohnが、母型主語位置へA移動する派生以外に、(1)のような派生も可能であると主張している。これは、proを普遍的に利用可能な実体と仮定し、また、派生の過程でproが指示表現により上書きされることを独立した操作として認めているからである。

次に(2)である。(2a)でlikesの補部に併合するproは、(2b)が示すよう

に元位置にコピーを残し、母型主語位置へA移動する。このとき pro は、可能な着地点である埋め込み節の主語位置を超えて、母型節の主語位置へ移動するため局所性条件に違反する。この違反を修復するためにA連鎖の尾部の pro が音声化される。(2d)で母型主語の pro は John により上書きされる。そのため、A連鎖の尾部の pro は3人称、男性、単数の ϕ 素性を持ち、また対格素性を持つため、him として音声化される。このようにして適格な文 John thinks Mary likes him. が作られる。ここで重要なことは、him が John を指す解釈は pro の移動に仲介され、そして John と him が連鎖を形成している点である。

3. 評価と課題

本書は Lebeaux (2009) が提案する pro の A 移動分析を発展させ、pro の局所的 A 移動だけでなく、非局所的 A 移動 / A バー移動を提案している。それにより、pro が指定主語条件に違反し、非局所的な位置にある名詞句を先行詞に取る構造や、総称の解釈を許す空の項を、照応形の移動理論で説明することを試みている。とりわけ、pro 移動が局所性条件に違反する場合、違反がどのように修復されるかを示した点は独創的である。

これまでの生成文法では pro 移動分析は有力ではなかったと思われるが、本書は pro 移動により代名詞と先行詞の間の指示関係を説明している点で、生成文法に新たなアプローチを提示したと言える。議論の進め方についても、言語事実の観察から出発し、生成文法で長く採用されている条件を照応形の移動理論に組み込み、観察結果を説明する手法は堅実と言える。

一方で問題となる点がある。以下では問題点を3点指摘する。1つ目は照応形の移動理論を導入している2章の説明が貧弱な点である。本書は P9 で、pro は派生の過程で指示表現により上書きされると仮定している。これは Lebeaux (2009: 29ff) に基づくと思われるが、指示表現による上書きがどのような仕組みであるかが不明瞭なため、Lebeaux (2009) に言及しながら説明が欲しかったところである。

また、本書は P9 で Hornstein (2001) の代名詞挿入の考えに従い、pro 移動が

局所性条件に違反するならば、連鎖の尾部が音声化されなければならないと仮定している。具体的には、(2b)のlikesの目的語のproが代名詞himとして音声化されることで、pro移動の局所性違反が修復されるとする方略である。これについても、なぜ連鎖の尾部が音声化されると局所性違反が修復されるのかという疑問が生じる。Hornstein (2001)の代名詞挿入の考えが詳細に説明されていれば、このような疑問は生じなかったと思われる。また、(2b)のlikesの目的語のproがどのようにしてhimとして具現されるかについても疑問が残る。本書によれば、母型主語のproがJohnに上書きされるのは(2d)のため、(2c)ではlikesの目的語proの ϕ 素性の値は未指定である。(2c)でlikesの目的語のproが、どのようにして3人称、男性、単数という素性を獲得し、himとして具現するのか、そしてこれに関連し、(2d)で母型主語のproがどのような仕組みでJohnに置き換えられるのかについて、説明を加える必要があると思われる。

2つ目は不適切移動に関する説明が不十分な点である。具体的には、5章の日本語の照応的な空の項の派生についてである。5章では、(3)のproのような日本語の照応的な空の代名詞の非局所性が論じられている。

- (3) Daremo₁-ga [Mary-ga [_{pro1} atama-ga warui to] itteiru to]
 everyone-Nom -Nom head -Nom bad Comp say Comp
 omotteiru.
 Think

‘Everyone₁ thinks that Mary say that pro₁ is stupid.’ (Abe (2014: 80))

(3)は、埋め込み節の空の主語proは、2つ上位の節の主語名詞句を先行詞に取ることができることを示している。本書は(3)のように、proが指定主語Mary-gaを超えて非局所的移動をする場合、proは(4a)のように1つ上位の節のCP指定部へ演算子移動した後、先行詞名詞句の位置へA移動すると提案している。

- (4) a. pro [CP pro [TP NP [CP pro [TP pro …]] …]] …
 ↑ ↑ ↑
 b. NP [CP pro [TP NP [CP pro [TP pro …]] …]] … (Abe (2014: 100))

生成文法ではAバー位置からA位置への移動を不適切な移動と仮定し、これを容認しない立場があることを考慮すると、(4a)のpro移動が不適切移動に当たらないことは説明する必要があると思われる。不適切移動に関しては2章P26でHicks (2009)に従うことが示唆されるため、5章もHicks (2009)の考えに従い、(4a)のproの移動は不適切移動に当たらないと仮定していると予想される。¹ (4)は以降の章でも採用される重要な分析であるため、5章でHicksの分析の説明にページを割いておけば、(4)はより説得力を持ったと思われる。

そして、3つ目は日本語の容認度に関する問題である。5章の議論は(3)が容認文であることを前提の一つとして進められているが、本稿執筆者のインフォーマントによれば、(3)は16名中11名がproの先行詞を *daremo* ‘everyone’ とする解釈を許さなかった。² (4)の派生は(3)以外の言語事実も根拠となっているため、直ちに(4)が否定されるわけではないが、約70%のインフォーマントが(3)の当該の解釈を容認しなかったことは、考慮すべきと思われる。

また、本稿執筆者のインフォーマントは、(3)以外の8つの文の容認度に関し本書とは異なる判断を下している。8文中4文(5章の(74)、6章の(53a)、(53b)、(61a))は16名全員、またはほぼ全員が非文と判断、あるいは本書の想定する解釈は不可能と回答した。そして残りの4文(5章の(6b)、(7b)、(11b)、7章の(48))は、16名中半数以上が非文と判断、または本書の想定する解釈は不可能と回答した。これらの文の容認度は再調査されるべきであろう。

注

¹ Hicks (2009)はtough構文の派生を論じる際、(i)のような複合的な構造を持つXPが移動することで、不適切移動の違反が回避されると提案している。

(i) [XP wh [DP TC subject]] (TC=Tough Construction)

(cf. Hicks (2009: 545))

具体的には、wh素性を主要部に持つXPが不定詞節内の動詞目的語位置からCP指定部へAバー移動した後、XP内部のTC subjectが母型節のTP指定部へA移動する。2つの異なる要素がAバー移動とA移動を受けるため、不適切移動は生じないとい

うのがHickの主張である。

² 当該の解釈を許さなかった11名のうち、4名は言語学の知識を持ち、7名は言語学の知識を持たない。また、当該の解釈を許した5名のうち、1名だけが言語学の知識を持ち、4名は言語学の知識を持たない。

参考文献

- Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Hicks, Glyn (2009) “Tough-Constructions and their Derivation,” *Linguistic Inquiry* 40, 535–566.
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist Theory of Construal*, Blackwell, Oxford.
- Lebeaux, David (2009) *Where does Binding Theory Apply?*, MIT Press, Cambridge, Mass.